

枇杷殿跡

平安初期の関白藤原基経がこの枇杷殿に住んでいました。その後、三男の藤原仲平に受け継がれ、それ以来、この邸宅は天皇家にゆかりのある貴族たちが代々受け継いできました。藤原敦忠などの有名な文人たちもここを住まいとしていました。

和歌を詠むことは宮廷やその周辺に暮らす貴族達の文化生活において、中心的な役割を果たしていました。彼らの暮らした邸宅は現在ほとんど残っていませんが、彼らの残した和歌は、彼らの優雅な生活を垣間見る窓口となってくれます。『百人一首』は日本の文学史上最も有名な詞華集の一つで、つぎにあげる敦忠の歌は、この『百人一首』に収められています。この歌は、日本の古典和歌が備えている、深い愛と激しい感情の典型を示しています。

逢ひ見てののちの心にくらぶれば昔はものを思はざりけり

1002年、この建物は藤原道長とその次女妍子のために改築されました。火事により御所が焼けた後、一条天皇がここを里内裏としました。一条天皇は1009年以降ここにうつりましたが、その際、日本で最も有名な物語の一つである、『源氏物語』の作者、紫式部や、著名な日記『枕草子』の作者である清少納言のような偉大な文学者も伴っていました。二人はどちらも宮仕えしていたのです。